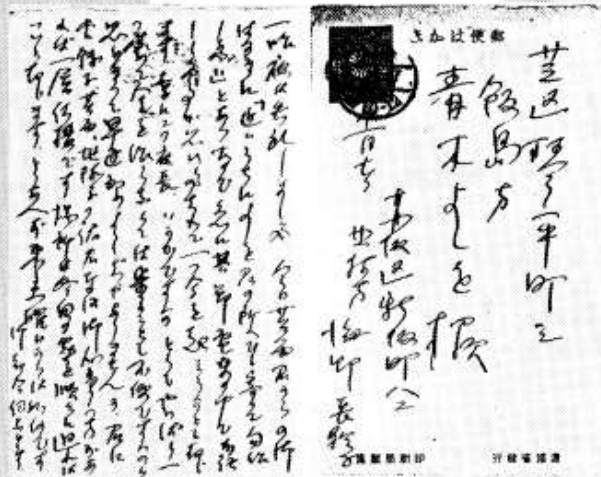
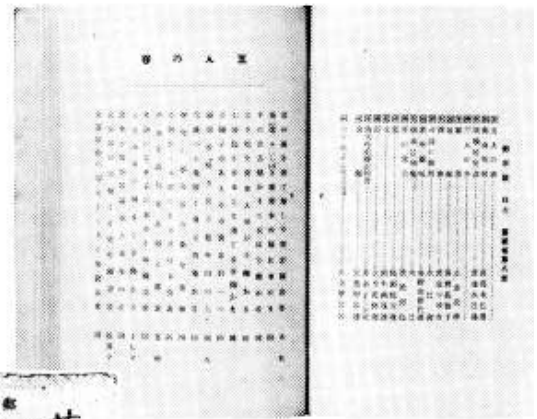


俳句・書簡



■大正5年

四季雜詠

(曲水1-1)

夏蚕眠りて松に來たりし驟雨かな

橋に來て四山明るし百舌鳥の聲

夜長の灯寝つかぬ鶏にとゞきけり

醜草に交じりて風の野菊かな

養魚池のまわりは風ある野菊かな

曲水句帖(水巴選)

(曲水1-2)

千竿に露一連や四山濃し

蔦鉢の露ふれば露の葉にあらは

曲水吟社10月例会 席題「渡り鳥、栗」

松揚げば蒼天渡る鳥迅し

網干すやこの高浪に鳥渡る

句帖

(曲水1-3)

(以下句帖||曲水句帖・吟社||曲水吟社)

庭掃いて僧隠れ去る萩高し

納屋人に夕餉を呼ぶや時雨來し

句帖

(曲水1-4)

冬薔薇の日も頼めなき落葉かな

寒燈吟 五句

(曲水1-5)

六人の句座に火桶やひそとある

日の梢静かに降らす落葉かな

(11月11日)

池の鴛鴦にひそと閉ざせる二階かな

(11月18日)

灸すゑて上総の海に避寒かな

(12月9日)

大風や葱畑の靱高く飛ぶ

(12月23日)

吟社師走例会 席題「師走、水鳥」

雪乱して虚空の風や浮寝鳥

枯芝に水鳥あげて日和かな

句帖

(曲水1-5)

鶏抱いて元朝の戸の主かな

火の見櫓の高きに見ゆる飾りかな

阿蘭陀の船見ゆる縁の手鞠かな

句帖

(曲水1-6)

枝の鳥うららのものを落しけり

春六題 自選

二月

暖国に大雪ありし二月かな

東風

くそ鷹のはたと止りぬ東風の枝

雪解

雪解宿橋危しと喚ばひ來ぬ

雛

雛段に置く亡き人の手鞠かな

鶯

鶯や今朝さめて在る浦の宿

木の芽

嵐山の木の芽を騒ぐ鴉かな

鳴雪翁祝賀記念句会 席題「春風」

春風や濡れて吹かる、棹の先

鳴雪翁に捧ぐ一人一句

句の弟子が訪ひ来て春を惜しみけり

■大正6年

句 帖 四句

蘆の芽に逆巻きて雪到りけり

児の挿せし茨枯れあり井の辺り

夜桜や人笑ひ行く塀の外

寒燈句会

足袋ついで冴返る夜の行燈哉

草の蝶皆水の上に飛びにけり

畑打の後ろ風ある大樹かな

山越せば村の名同じ柳かな

蚕室や灯置けば古き太柱

鶏しまひ終えて水辺の暮れ遅し

茶摘女は谷に下りたる昼飼かな

句 帖

春の海に船より落す巨材かな

(曲水1-7)

(曲水1-8)

(曲水2-1)

(2月17日)

(3月10日)

()

(3月31日)

(4月7日)

(4月21日)

()

(曲水2-1)

風やみし暫しを牡丹散りしよな

寒燈句会

山裾の茶を作る家の牡丹かな

祭人に遠く燃え居る山火かな

井晒すや畑に吹かる、芥子赤し

芥子に立つ子の各々の帽子かな

稗蒔に水遣るや後ろ灯りけり

句 帖

草餅や椎深く住む年久し

草餅を食ひて鉞坑に入りにけり

吟社七月例会 席題「薰風、裸」

大風の芭蕉を剪りし裸かな

薰風や裾の底の石切場

句 帖

草深く住みて月古る団扇かな

大甕に飼はる、鯉や蔦若葉

賓客に離亭を掃くや棕櫚の花

おのがじし紫陽花咲けり日の表

灯せば障子にありぬなめくぢり

花氷解けたる水をすてにけり

(曲水2-3)

(5月26日)

(5月30日)

(6月16日)

()

(7月6日)

(曲水2-2)

(曲水2-3)

静岡・長頸子

()

()

()

句 帖

(曲水2-4)

九月十一日 青木幸太郎宛

夾竹桃に暁の鳥ゐて小雨かな
起し絵や廊の中の煙草店
風鈴の短冊飛んで石路にあり
板廂に雨来し廻り燈籠かな

寒燈句会

(9月15日)

冷かに葛の葉懸けし大樹かな

(9月22日)

夜学人に高く打ちたる時計かな

葡萄棚に高く暗れたる夜空かな

吟社十月例会 席題「草の花」

()

富士見えしが又降る雨や草の花

ある人に

草花の咲く野の家を忘れしか

句 帖

(曲水2-5)

仲秋の海に對けたる机かな

町の灯に遠く月ある花野かな

税関の旗に風なし雲の峰

曼珠沙華咲くひと、こや山の湖

年木樵る罅や晴れし峰の寺

霧 (野鳥選)

霧の灯に人の行来や浅草寺

御無沙汰を重ねつつ昨夜更けて上京致候、東京の地を踏めばこの二カ月の句作をなまけしが痛切に悔いられ申候。本日学校よりの帰途苔雨兄を訪ねて何か御勉強の由承はり御奮励の程感じ入り候。折角御健勝を祈り候。来る上曜の晩御目にかかるが楽しみに御座候。

九月十九日 青木幸太郎宛 午後九時半 長

今晚はわざわざ御光来被下候由を不在いたし何とも申訳なく且つ残念に候。実は先夜先生よりの御命令にて午前中より出掛け候ところ例の通りにて大した用もなければ帰ることもならず只今まで御邪魔いたし候次第。なほ来る二十三日の吟行は晴雨に係らず午前十時までに先生御宅へ参集の由昼食はそばや入自弁の筈に御座候。先は右まで。

十二月二十八日 青木幸太郎宛 深更 厚一

先夜は失礼いたしました。また今晚は折角お訪ね下さいましたのを不在いたしました。また今晩は折角お訪ね下さいましたのを不在いたしました。また今晩は折角お訪ね下さいましたのを不在いたしました。また今晩は折角お訪ね下さいましたのを不在いたしました。明日は帰るでのびく／＼になつてをります。明後三十日の午前の汽車では是非とも帰りたいと思つてをりましたが、今日先生から同夜曲水が出来るから来いとのお御はがきで又一と思案しなければなりません、然し方が一あなたも静岡においでになりますやうな事があれば御一緒に願いたいと存じます。明二十九日夜十時半頃からは在宅いたします御はがきなりと戴けますまいか。

寒燈句会

柿落せし竿にまだゐる蜻蛉かな

(10月6日)

瓦工場

裏山の月に煙れる竈かな

(10月13日)

秋風や児がもてあそぶ縄の片

(10月20日)

吟社十一月例会 席題「木犀、障子張る」

木犀に竹そよぎ暮るる机かな

寒燈句会

驟雨来て濡れたる縁や菊の雛

(11月3日)

隣国が見ゆる峠や草の花

(11月10日)

草花に月のさしたる戸口かな

寒燈吟(水巴選)

豚小屋の霜にかゞやく日の出かな

(12月1日)

就中無花果の下や今朝の霜

()

碧潭の飛沫に咲ける茶の木かな

(12月8日)

吟社師走例会 席題「枯草」

川尻の草枯に来るは千鳥かな

畑地糶るや草枯に置く椅子二つ

死かちし鳥を埋むる鍬や冬日影

石に落ちて飛びし木の実や冬日影

税関の火鉢小さいく守る夜かな

句帖

(曲水2-7)

初冬や谷の深きに観世音

轍深く石に曲れる枯野かな

鷹

(蛇笏選)

くそ鷹のふためき逃げし古枝かな

氷

(桃孫選)

氷る底に赤きものある金魚かな

大正7年

「五人の春」より

大屋根の雪解くる音や福寿草

(曲水2-8)

大藁屋根の雪をくぐりて年賀かな

静岡句会(水巴選)

(曲水2-9)

嶺嵐す吹雪となりぬ製板所

句帖

河豚の座に白う配りし小皿かな

静岡・長頸子

道の辺の除夜を搗き居る水車かな

樹人苔雨の両君と郷里の賤機山に登る

虎落鳴って冬山人を止めざる

帰省

(曲水2-10)

冬木根に靴脱いで墓を掃きにけり

死ぬる子の足のぬくみの湯婆かな

花足袋の鴛鴦に似て編まれけり

静岡句会の記

静岡で曲水の句会をして見やうと云ふ話は、去年の秋頃から同人の懸案になって居た。併しそうそう気儘に飛出すことも出来ず、いつか／＼と話し合つて居るうちに一陽来復、此の新年の休みを利用して、上野の例会の方は万事よしを君にお願する事として、行季匆忙、苔雨と樹人の兩名が、帰省中の長頸子君を驚かす事となった。

大正七年一月六日、東京でも花山亭に初句会が開かれると云ふ日、長頸子君の案内で、浅間神社から風の中を賤機山へ上つて、可なりに疲れた身体を、会場と定められた同君の宅へ落付いたのが一時を少し廻つて居た。途中三人合作の祝電「富士を挟んで東西春の句会かな」と云ふのを花山亭宛に送つた。会場は長頸子君の令弟烏喙子君の肝煎りで万端遺漏なく、句題を「松納め」「水仙」と極めて鴨居に貼り出す頃には、処の郵便局へ勤めて居られる柴月老人を筆頭に、在静の俳友諸君がつぎつぎにやつて来られる。会場の八畳の間は何となく水巴先生のお室に似て居た。先生の祝電「シヨクンノシンネントケフノガエンヲシユクス」と花酔さんの祝句「ゾウニバラノメダキホクラハキタマヘ」の披露があつて句作に入る。銀屏の前の支那水仙が炭の薫りと交つて、泌々と吟腸をそそるものがあつた。雪に彩られた富士は日を浴びながら始終句作の窓に落ちた。第二回「雪」を作る頃松のとれた府中の夜は静かに更けて、会場の空気は益々緊張しつゝあつた。(樹人)

附記

長頸子

小さいなりに句会を開くとすると小庵には正に大事である。

それに幾人來会者があるか當がつかないが、取敢へず二十人ばかりの座布団を用意させて一切を弟に托して、前日來々岡中の樹人君と同道、苔雨君を停車場に迎へて家に戻ると、既に龍爪会の三四の方が見えて居た、座敷の八畳と、次の間が半分ばかり屏風で仕切つて座布団と火鉢が並んでゐる——これで人数さへ揃へば兎に角一つの俳席である。それからその來会者に続いて山灌氏が見え、静岡の鳴雪翁の名称を捧げる柴月氏が見えてからは來会者が一切れになった。柴月氏の話しでは三六会の諸君は皆残念ながら出席し兼ねるとの事であつたが、江尻及びその附近を中心とし他の曲水吟社員をも含む反省吟社諸君が一人も見えないのは淋しい、江尻へ長距離電話を掛けたが一向に要領を得ないで四時になつてしまつたので思ひ切る。來会者の多数といふ事は句作の上には考へものではあるが、小庵初めての句会であり、わざ／＼遠く來会された樹人の為にも聊か淋しかったのは済まなかつた。

然し静岡俳壇の中心たる龍爪会の諸君と、これから打つて出やうとする静岡中学校の若い人達が加つて、凡そ十四人落付いた気分で作したのは私として大きな喜びであつた。

最初の席題を終つて次の「雪」に移らうとすると、樹人苔雨両君と夕食持参の柴月氏を除く諸君は「写生にゆく」と言ひながら一斉に外へ出て行つた。暫くして又一斉に戻られるや、山灌氏の二十句を筆頭に皆どし／＼句箋を箱に投込まれたのは驚いた。そうして皆一様に赤い顔をしてゐたのはたゞに夜風の寒かつたばかりではないらしい。座の中央に忽ちに堆く積んだ句箋は忽ちに浄書されて、選句、披露、十時散会。

会を終れば、また匆忙と帰京される樹人君を送つて、苔雨君

と三人深更の停車場へ急いだ。樹人君の暖く着込んだ外套の内
衣竄深く、今日の席上吟は収められて、一日後の東京なる流觴
居へ運ばれるのである。後に知ったのであるが、此の日東京の
曲水例会の席題も、「松納め、水仙」であつたさうだ。期せず
してこの暗合を見たのは一奇といふべきであつた。(曲水2-9)

一月八日 青木幸太郎宛 静岡市鷹匠町三 海野長頸子

六日夕刻より来岡中の樹人君と七日朝来岡の苔雨君を停車場
に迎へその足にて三人にて烈風の中の賤機山へ登り静岡の螢を
瞰下しつつ真向の富士に対して東京なる君を偲び候 それより
帰宅俳席をしき候ところへ貴兄よりのおはがきつづきて先生及
び花醉氏の祝電到着なか／＼の景氣にて候 当地句会は思ひの
外来会者尠く候ひしがしみじみと句作出来句稿は同夜帰京の樹
人君携帯いたし候へば今頃は水巴先生の御手許へ差上げし事と
存じ候 花山亭の方のはいかゞに候ひしや定めし御骨折りの事
と察しをり候 苔雨君も小生も十二日夜の小生許の寒燈会初会
迄には上京すべく候 また／＼東京にて御目にかゝるが楽しみ
に御座候 御健吟の程祈りあげ候 頓首

寒 燈 吟 (水巴選)

(曲水2-10)

氷遠く翔る鳥ある棚田かな
池の氷鳴き居る松の鶏かな

(1月19日)

流觴居小集 席題「風邪」

梅の幹に日は陰りゆく風邪ご、ち

(1月20日)

流觴居小集 席題「冬空」

冬空や大瀧涸れし奥の院

(1月23日)

一月十一日 青木幸太郎宛 静岡にて 長

前略 或は樹人氏より明土曜日の寒燈会は小生宅にて相催す
様御通知いたし候かとも存じ候へど少々都合悪しくまだ明日中
には小生上京いたしかね候へば勢同会は次回に順延いたしたく
候 何卒左様御含み願度候

一月十七日 青木幸太郎宛 海野長頸子

御無沙汰いたし候 このお寒さに御機嫌いかがに候や 小生
ようやく二三日前に上京仕り候 過日の夜は小生の御通知申上
るが遅れたためわざ／＼の御足労を煩し恐縮の至りに候 こん
どこそいつはりなく明後土曜日夜は寒燈会新年第一回を小生宅
にて相催すべく、何卒御早ばやの御光来待上候 先生にはすでに
両三度御目にかかり申候 苔雨兄も一昨日帰京なされ候 先は
御しらせ迄

一月二十六日夜 青木幸太郎宛 寒燈会二人

君の好きな「火事」を出題してお待ちしました処とう／＼御
出がなかつたのは残念でした、この寒さに風邪でも召したんぢ
やありませんか 明後月曜の晩は例の樹人氏の宿直室句会だ
そうです、寒燈会第六回のつもりなんだそうですからどうぞ御
出かけ下さい

寺に火の移りしさまや銀杏高し 樹人

鯨見の人に交りて沙門かな 長

父ひとりこと／＼煮るや鯨なべ 苔雨

寒燈吟（水巴選）

樹々凍てて落す葉もなき夜明かな
埋火に客去りて頬を温めけり

（2月2日）

吟社三月例会 席題「梅」

水源探查梅咲く谷に昼餉かな

句 帖

野の兵に菓子かくれ売る霞かな
樞鳥が落す木の実も植えにけり

句 帖

恋猫のいつ戻りゐし机辺かな
暮る、まの餘花に庭踏む草履かな
短夜や籠に飼わるる鴉の子

（曲水3-1）

夕日はげしく椎に暮れたり浴衣きる

春の月（鬼城選）

春の月年古りし門の槐かな

春の月の暗がりに捨つ産湯かな

悼 句（省亭画伯追悼句会）

香煙の花鳥ともなれ五月雨

（曲水3-2）

席題「餘花」（〆）

山の湯の餘花に袷を著初めたり

吟社六月例会 席題「梅雨、時鳥」

夜もすがら梅雨の水車の灯かな

一月三十一日 青木幸太郎宛 海野長頸子

先日はあんな端書を差上げて置きながら樹人氏の会へは不参してしまつて何とも申訳ありません。多分苔雨君はゆかれて賑かに御句作なされた事と存じます。あの頃以来、僕は風邪の熱やら歯痛のなやみやらでずっと弱つてをります。ところで明後日の寒燈会は勝手ながら私の宅で催したいと存じます、何とぞ御都合なすつて御出席のことを願ひます、樹人君苔雨君へも同時に知せて置きますさよなら

三月三十一日深更 青木幸太郎宛 長頸子

昨晩は早速の御光来を重ね／＼の失礼何とも御詫の申上やうもなく候御詫は今度御目にかゝりし時のこと、して、実は曲水俳句鈔の仕事もまづ／＼一昨晩にて一段となり候へば小生も明日あたり一寸帰郷いたすべく存じをり候ところ本日また／＼先生よりの急用との御手紙にて伺ひしところ、兼てからの大先生の御病氣、昨晩あたりより急に重りて先生も令妹も三筋町の方へ趣かれをる次第にて小生も三筋町の方へ伺つて御用を聞き更に浜町へ戻りて仕事をいたすやうなわけにて、目下のところでは大先生の御容体は殆んど危篤に近き状態にてまことに心掛りの有様に御座候。御病症は黄疽の由なれど心臓弱られをり候由非常に憂慮いたされ候、そんなわけにて先生も露女様もここ四五日は三筋町の方へ詰切りの由に候。先はおわびながら御しらせまで

苗床にほそく梅雨の芽生かな

夏 菊

煙管磨きて今朝用もなし夏の菊

句 帖

夏書僧たましく深を仰ぎけり

富士の雪解けて廻船戻りけり

行水や星の下行くうすれ雲

羽抜鳥人に逐はれて羽搏けり

山崩れ昼顔に道通ひけり

荏苒と父祖よりの醬油造りけり

蝙蝠 (選者吟)

月の野に蝙蝠淡き未明かな

句 帖

(曲水3-3)

納涼人に絶えて雨なき銀河かな

箱根下りれば三島は宵の納涼かな

起し絵を消してしめたる大戸かな

夜詣での人に茶店や枇杷葉湯

燈籠消えて闇とこしへの潮かな

曲水吟社七月例会

七月七日。麹町区三番町の新流觴居に、例会を開く。晴れて暑い日だったにも拘らず定刻からの来会者は二十幾人かあって、八畳二間打通した席上は少し手狭な位だった。一葉の電報が座

にあった。「ナツヤセヤヒビノツクエニカベシロシ」、碧雲居

氏からのであった。暑いので庭に面した椽側の方へ出て句案す

る人が多い。椽側には岐阜提灯が二つ、その間に走馬燈が吊さ

れてある。はばかりへ起つ人が、ひよつと立上る拍子に度々そ

れに頭を打ちつける。その度に走馬燈は軽ろく揺れた。席上

には麦湯を一ぱい容れたすさまじく大きい雅味のある土瓶が出て

ゐた。その麦湯を飲みながら皆暑さを忘れて句作した。例の通

り四時半締切。浄書、互選、徂春君の披講。(高点句他中畧)

この披講が始まらうとしてゐる処へ山田蕙子君が見えて一入賑

かさが増した。蕙子君は曲水吟社設立以前から関係深い人で、

目下北京日本公使館付から在伊太利日本大使館へ榮転に付て賜

暇帰朝中といふ榮えあり且つしかつめらしい境遇にある。今日

も他の歓迎会とかから廻ったので、これもしかつめらしいフロ

ックコートといふ扮装だったが、「どうも冬のを着てゐますか

ら御免蒙って……」と忽ちに脱いですがくしい姿になって八

方からの久潤の挨拶に忙しかった。

かくて、披講が済むと同時に席上は君の歓迎句会と化して。

葭戸を後に先生と並んだ同君の頭の上の鴨居には、「蕙子君歡

迎句会」と書いた紙片が貼出されて、君が出題にかかる「蚊遣」

五句を作ることになった。

この頃から椽側の簾は捲上られてしまつて、夜涼の中に岐阜

提灯にも走馬燈にも灯が入った。肥つて歸られた蕙子君は円み

のある声で元氣よく話す、支那の金扇を明い灯にひらめかしな

がら。句作三十分にて締切、互選、披講終つたのは九時頃。会

衆は折から外の通りの二七不動の縁日の雑踏の中に散つて行つ

た。(長頸子記)

鶏林俳句集第一集（水巴選）

雷の空にいたく煙上ぐ工場かな

葭切や驟雨晴れゆく茶屋の松

一つ咲いて一つ落つ蜀葵残暑かな

颯が居て葉落すや秋の水

草市の後ろを下る夜舟かな

句 帖

叔父叔母の新盆来たり茄子の花

富士の北に夜々の雲起つ日干かな

流觴居小集

潮全く満ちし葉末の蛍かな

蛍見しが道海沿ひとなりけり

吟社八月例会 席題「蟻」他

蟻見つつ念なし繭を煮て独り

句 帖

月遅き谷となりたる河鹿かな

新涼や夜雨あがりし藁廂

吟社九月例会 席題「夜寒、相撲」

萩芙蓉夜寒の草となりけり

夜寒さの時計が鳴るや百姓家

（曲水3―4）

（曲水3―5）

静岡・長頸子

（曲水3―6）

俳諧走馬燈

（曲水3―3）

○古人の句が良く見える。やがて厭に見える。それから再び良く見える。少し俳句が解つて来た時である。

○色んな人が居て色んな句を作つて居る。そして、てんでに人の句を褒めたりけなしたり嘲けつたりしている。然し俳句な何時でも黙つてゐる。

○一家みな句作るもよし。友二人句作るもよし。己れ独り句作るもよし。されど畢竟は我が独りなり。

○月並は月並として醜なり、論ずべからず。されど月並ならずして醜の醜なるものあり、怠る可からず。

○的を貫ぬく矢は直ぐなるべく句を攫むの心は直ぐなるを宜しとす。

八月一日 青木幸太郎宛

神奈川県中郡秦野町上曾屋片岡伝吉様方

葉月朔日夜十時 東京にて長頸子

旅だよりうれしく拝見いたしました。就中大山へゆく夜の道者の篝火が見えるといふのは面白いぢやありませんか 苔雨君が非常に羨んでゐます。

毎日東京の暑さつたらありませんよ、殊に今日なんか暑い

つたらこう暑いと愚痴の程度を越してだまってゐるに限りません。今、珍しく、すざましい音をたつて遠くから夕立が迫ってきました。思ひきつて屋根をたたきだしました。殆んど狂はしいばかりの眼で外をながめてゐます、この雨は多分、お羽黒蟻の舞ふ奏野の森の泉にも降つてゐませう。ふとそんな事が思はれます。

曲水はまた印刷所の方が工合悪しく六日にしか出ないさうです、ま、ゆつくり遊んでいらつしやい。さようなら

八月二十一日 青木幸太郎宛

東京都牛込区市ケ谷富久町百二十二

静岡市鷹匠町 海野長頸子

いつまでも暑き事に候 御無沙汰いたしをり候へど御変りもなき事と存じ候。小生句作も出来ずただく漫然と日を暮しをる始末に御座候 曲水事務の方もすでに御手に歸し候事なるべく嘸かし御手数なるべし事と御察し申上候、本日徂春兄よりのはがきにて八月号も再校まで運びし由、ひたすら刊行をまちをり候 残暑の庭に蜀葵が日々咲いては落ち、夜は富士の根に稲妻がたち候 且今は蟬が暑く候。苔雨君はじめ諸兄によろしく御伝え願はしく候 匆々

八月二十五日 東京・青木幸太郎宛

静岡市鷹匠町 海野 厚一

思ひがけなき御無沙汰いたし候

御かはりもなく御句作の事と存じ上げ候 小生帰省後一向なまけをり候て末だ曲水句帖も一句も出来ぬ有様閉口いたしをり候。

最早どうやら秋風立ちそめ候にまた今年も夏を充分作つてなきは気がもめ候。曲水の御仕事おいそがしく候はん。先生はじめ諸君あいかはらず御多作に候や。曲水八月号ひたすら待ちをり候。

昨日小さな池を浚ひ今日は朝より腰いたくて弱りをり候

九月十七日夜 青木幸太郎宛

静岡市鷹匠町 海野 厚一

秋風吹く日と相成り候。御健勝に候や、小生、一向に御ぶさを重ね、いつぞやの御丁寧なる御手紙に対しても御返事差上べくして差上ず、最早御詫び願う余地なきかと恐縮いたしをり候 吉野先生が御帰京なされ候由過日の歓迎句会は定めし賑かなりし事と存候、不参遺憾に候 さて明日はどうあつても上京いたすべくその上の御面晤をたのしみ候。流觴居の秋草見る事もまた楽しみの一つに御座候。匆々

俳句評釈

水草の吹きよりし人や草の市 水 巴

(曲水316)

夜涼を趁ふ人々に賑ふ町も、草市の立つた一角は人の往来も何となくしめやかである。蓮の花、真菰、溝萩などの哀れくしい中に灯つた小商人の灯も、芋殻や溝萩を提げて通る女の姿も思ひなしか一様にしめやかに眺められる。同じやうに魂迎へる小買物に來た人々の心は懐かしくしめやかに思はれる。こここの商人の青々しい灯の囲りに寄り合うて仏のものを買つてゐるあの人々は、たまたま風に吹かれて寄り合うた水草のやうな気がする。いや、水草の吹かれ寄つたのではあるまいか。

比喩もここまで来て初めて価値を生ずる。

左衛門歓迎会 席題「柳散る」

(曲水3-5)

柳散る市に日輪大いなり

柳散る日向日陰や荷足舟

吟社十一月例会 席題「秋の雲」

柿

巖壁を離れぬ舟や秋の雲

誰か出て背戸の柿搦ぐ月夜哉

句 帖

(曲水3-6)

野分空に吹き流さる、雀かな

十六夜の更け来し雲や川二階

臥待やもの煮えてゐる妻の鍋

吟社師走例会 席題「八ッ手他」

(曲水3-7)

花八ッ手昨日に同じ干衣かな

■大正8年

近 詠

(曲水3-9)

樑葉の霜に庵の日さし初めたり

鶏林俳句集 第二集

(曲水3-10)

元日や暮れなんとする比良の雪

咳や石に逃げたる三十三才

麗 (選者吟)

麗かに瀧の遠音や山番屋

麗かの井戸の端なる茶椀哉

七月七日 青木幸太郎 (道後霊ノ湯の写真ハガキ)

伊予道後温泉鮎屋方 海野厚一

いつぞやお邪魔いたしました。月初めから急に思ひ立ってこちらに参つてをります、思ひきつて浮世ばなれがしたいと思ひますから参つてからまだ一度も新聞も見ない始末です、たゞ毎日湯に浸るのが仕事のやうです、こちらは客がてんでに手拭をさげて温泉場に出掛けるしくみで、一寸面白いところです。松山とは電車で十分城山の天主がよく見えます。昨日一日晴れたきりで毎日の雨には弱つてをります、またいづれ 皆様によろしく

七月八日 加藤 余石宛 静岡市呉服町静岡銀行内

(道後カラ松山城ヲ望ム写真ハガキ)

道後 湯の町 ふな屋方 海野長頸子

道後も松山も俳句には縁深いところですが、子規居士の遺髪を葬った寺もどこかがあると、宿へ遊びに来た俳句をやる少年が話して行きました、たゞあはたゞしく旅立って来ましたので、虚子氏の松山に關した作品などを少しも読んでこなかったのが残念です。とにかく本上を離れた国だけにどことなくのんびりとした気分で、のんきに暮すにはい、ところどころです。この絵の城もい、城です公園には鳴雪翁の「元日や」の碑が新しく建つてをります。

吟社五月例会 席題「端午」

鯉幟打合ふ下の打球かな

句 帖

(曲水4-1)

日の下に御顔かがやく踏絵かな
帰る雁佐渡は見えゐて遠きかな

花の戸や足投げ出して明盲

厨水落つる江の蘆芽ぐみけり

吟社六月例会 席題「更衣、鮎」

格子出れば夜の人通り更衣

句 帖 三句

(曲水4-6)

何の種とも知らず蒔きたる秋日かな
人の死や月をかくして雲の峰

静岡長頸子

伊予道後

月の坂温泉を戻り来る禿かな

近詠二句

(曲水4-7)

麴や紅毛の児が銀の匙
夜長虫墨吐き死にし畳かな

■大正10年

涛衣、它可子、余石君歓迎句会 於流觴居 (曲水6-6)

若竹や畳にありし人くらし

伊豆・狩野川支社例会

(曲水6-9)

水や秋ひしと蟬なく草垂穂

新涼の土しみじみと夜明なる

■大正11年

一月元旦 東京青木幸太郎宛

(修善寺新井旅館の写真ハガキ)

修善寺新井にて 長頸子

伊豆の国湯の里より新年の

御慶申上げ 併せて御幸祈上候

御降や湯壺に出会ふ去年の顔

大正十一年一月元旦

雲ありて月の高さの余寒かな

(曲水7-3)

寒燈句会

月ながら天城焼け居る深夜かな

(3月1日)

春寒き影をりくや沼の鷺

近詠九句(水巴選)

(曲水7-3)

秋風がもて来る雪よ高嶺草

寒々と夕焼うつる野菊かな

山国の水ざうめける秋日かな
富士かけて大雪つもる月夜かな
消えがての雪よ枯萩日南なる
冬日落ちて大地の果ての岬かな
短日や入日と消えて嶺の雲
鶴啼いて夕づく山の師走かな

出 郷

兄弟に月夜の馬車となりにけり

近詠五句（水巴選）

冬山の深さ果て無く曇りけり
天かけてもつる、嶺々の冬日かな
大風の後なる月の死相かな
残燈に温泉けむれる雪解かな

修善寺範頼之墓

山茶花や濁りに生きて山の鯉

句 帖

大樹影地に浮く月や春の雷
雨かとも春夜音なし天城の火

近詠五句

夜桑摘みし髪解くや灯に遠く居て
朴ちつて冷ゆるばかりや月の幹
天城焼く火に風見えて大いなる

足袋かゝる膝に忘れし密柑かな
冬夜行く身にけはしさを銀座の灯

吟社六月例会 席題「若葉、梅雨」

梅雨の樹々ぼさと暮れたる虚空かな
若葉雨古沼音を立てにけり
梅雨の沼おどろに暮れてふりしきる
小さき町かくして梅雨の木立かな

句 帖

如何に愛でん野菊すがれて水明り
曼珠沙華束のま秋の赤かりし
色鳥の二つゐて鳴く一つかな

句 帖

（曲水7-8）

淋しさに生きてみつむる春日かな
冴返る畑の月夜や芽ぐむもの
兄弟三人自炊（二句）
月夜よし弟木の芽摘んで来よ
行く雁に夜深き飯の炊けたりし

吟社師走例会 於花山亭

二人居に長き夜落ちて枯野かな

（曲水7-6）

（曲水7-5）

（曲水7-4）

季題寸言

(曲水8-1)

寒い／＼と帰つて来た父。待つてゐて火鉢の傍で甘栗をむく
二十七と二十四の自分達兄弟。三人の冬はこの時温かい。

(冬の夜)

■大正12年

立春句座

(曲水8-4)

春立つや空をのぞける山椒の眼

十月九日 鈴木三千代宛(大阪市外吹田町上井一の八一)

東京目黒三六九

海野 厚一

大阪の新居よりの便り今日到着 父上はじめ安堵いたし候
御主人はじめ御機嫌らしき御様子何より、久々の都住居何かと、
物新らしき感に甲斐／＼しく御暮しの事と察しをり候 こちら、
其後とも別にかわりし事もなく御安心下され度、なれど、父上
は御病後の事故一時はなか／＼案じ候も震後の疲労もさしたる
事もなく遅々ながらおひ／＼に恢復に向はれ候様、しかし充分
の注意はいたしをり候 ことにこれからは寒さに向ふ事とて、
思ひなしか今年の秋風は早くもすさびさうにて、この冬は一し
ほの寒さと案じられ候が、あれほどの震火に家もつぶれず焼か
れもせぬは何よりと申すべくありがたき事としみ／＼に存せら
れ候

思へば八月末上京しくれしは何よりの仕合せにて、あの折父
上に元氣が出で候は全くその許の力と、父上はじめよろこび合
ひ、あの後、お札やら何やら長々手紙書きおくらんと存候を一

日二日の事にてあの大地震となりついそのまゝになり候を当時
は幾度か残念に思出し候 入れかほりに萩間より御送り下され
候卵は三十一日の午后到着、折返し御札状さしだし候へど或ひ
は不達かとも今は考へ候 しかしあの卵にて大たすかりいたし、
十ばかりは損れて着きしをその夜いり卵に造りしが、翌日の地
震には、水近く置きしがさん／＼に埃かむり空腹をかゝえて、
口惜くながめ候も今はなか／＼に面白く候。あの翌日よりより
は、鶏卵など何処を求めてもなき中、せめても残りしものが、
玄米の飯の度毎に父への唯一つの滋養物と相成しは当時どれほ
ど心丈夫に存候しか、くれ／＼も御礼申上候

地震と申せずでに一ヶ月余りも過ぎし今日、この辺りは最早
や平常通りの静けさにかへり候も一度市中に参れば まだ／＼
一面の焼野原にてお互ひに記憶せるありし日の東京は、今は夢
のまた夢に候 焼けのこりの建物を爆破する工兵隊の作業の爆
音などいまなほ、日々にこのあたりまで聞こえまゐり、なほ時
折は小さき地震揺れ来るなど、その都度にすざましかりし一日二
日頃の記憶を新たにいたし候。当時二三日の事にてその許も春
樹も帰国のあとにてあのおそろしさをのがれ候はまことに幸運
と申すべく、震後直ちに庭にのがれて揺りかへしをおそれつつ
椅子の上にて幾度父上とそれを話し候ひし事か、翌日よりは暴
徒来襲の騒ぎ食糧缺乏の不安それこれの度毎にいつも思ひ出候
はその事に候ひし。この辺りもいまは避難者大分に入りこみ、
不便極まりなきこの目黒あたりも一ヶ月にして二倍の人々と相
成候やうに察せられ候

今日母上の手紙にてこの程中静岡の家の手伝なされし模様其
他くわしく申しこされいろ／＼の意味にてよろこはしく安堵い

たし候 昨日は欣也よりも同様のよき便りに接し候

いろいろ申したく候へど今日はこれにて拱くべく、御主人に
くれぐれもよろしくその許よりお申入願度候 久々にて変りし
土地故御自愛專一になさるべく候 不盡

十月九日夕 東京目黒 兄

三千代殿

■大正13年

一月元旦 青木幸太郎宛

東京都下目黒区三六九 海野 厚一

賀正

日本がなにがなうれしお元日

甲子元旦

長頸子

季題寸言三章

何といつても、元日はいゝ。が、強いて言へば、それも午前
十時までだ。元日や草の戸越しの麦畠……日本はいゝ、など、し
みじみ思ふ。——十一時が過ぎたら、もういけない。

二日は——廻礼もよして、朝寝をして、家内中で遊びたい。
親と子がくつろいでな……、歌留多なら、源平でない。散らし
といふ心持。

三日は眼覚めの欠伸が二つ。

近 詠

(曲水9-6)

わたつみの底に網這ふ梅雨かな
すみくくと大空暮れぬ蓑虫よ

落の葉の秋のしじまようつりゆく

震後籠居

秋の日のあまりに明かし門の外

某氏旧居

颯啼いて落の葉ばかり秋日かな

句 帖

(曲水9-7)

蓑虫のいとなみよ秋の深みたれ

春の夜の闇ただよへり燈を消して

友来たりて我が像を描く

閑かにもぼけし日ざしや桃の花

入信の後は淨らかに住みなせしがその寡婦みまかりぬ

湯灌の燈そのままにある蛙かな

曲水吟社五月例会 席題「柳、行春」

荷揚して濁りし日やな柳影

いやはての春行くか草のあかるさに

句 帖

(曲水9-8)

髪刈つて雨にぎはしや夜半の春

籠青う魚介に春も名残かな

春の夜や更けてゐたりし風の原